

『哲学字彙』の和製漢語 —その語基の生成法・造語法—

高野 繁 男

〈要旨〉本論文は、資料『哲学字彙』初版(1881・明治14年)に収録されている全語彙をその造語要素である「語基」(stem)に分解し、その語基のうち、新たに生成されたものを対象に、語基の生成法を明らかにし、その語基を再び語に戻すことで、語を構成するシステム、つまり和製漢語の造語法を追求する。

また、この期に生成された語基のうち、現代語として活用されているものと、そうではなくすで消滅(39.7%)し、訳し換えられているものがある。どのような語・語基が残り、どのような語・語基が消滅するのか。その語基の単位である漢字のレベル、語を構成する語法のレベルを基本に論じた。

1. はじめに

近代日本語史で特筆されるのは、大量の語彙が短日時に生産されたことである。この現象は、知られていることであるが、日本人がそれまでに体験したことのない西洋の未知の制度・思想などを急激に移入するために造った訳語によるものである。とくに、漢語が急増した。その実態を観察すると、幕末から明治前期の訳語造りは、まず語基(stem)を確定することから始まったと考えられる。

ここでいう「語基」とは、語を構成する要素、造語要素のことである。語の各構成要素は承接の関係で結合している。そして、すべての語の基本となり、かつ造語要素として機能するのは、漢語では、1字語、2字語、3字語である。4字語以上は「2字語+2字語」、「2字語+3字語」のような構造になっている。ただ、このうち3字語は、た

とえば「語彙論」という場合「語彙-論」のように分解できる。「語彙」は2字語、「論」は1字語である。このようにみえてくると、3字語は基本単位として認めるが、語の構成要素としては、1字からなる要素と2字からなる要素ということになる。このようにして得られた要素のことを「語基」(stem)と呼ぶ。

このことを『哲学字彙』の用語によって確認すると、たとえば次のようである。

徳(トク) Virtue

哲学(テツガク) Philosophy

哲学-士(テツガク-シ) Philosopher

思弁-哲学(シベン-テツガク) Speculative philosophy

帰納-完全-法(キノウ-カンゼン-ホウ) Perfect induction

1字語「徳」は、それ自体単独で語となり、また語基となって2字語の要素となる。たとえば「道徳」のような語を合成する。しかし、1字語は、新語・新語基の造成という点では、その可能性はきわめて少ない。

2字語「哲学」は、これ自体、語(word)であるが、これを1次的と考えると二次的には「思弁」(speculative)を伴って「思弁-哲学」という複合語(compound word)を造るが、ここでは「思弁」(前接<pre>)も「哲学」(後接<post>)も語基(造語要素)ということになる。また「哲学士」(philosopher)も「哲学-士」のように分解可能であり、いわゆる派生語(derivative)を造る。この場合「士」は接尾辞(suffix)であるが、形態的には後接語基(post)である。

この原理にしたがって、語基を以下のように分類する。

I 自立形式 (Free form)

- 1) 単立語基 (Free)
- 2) 単立・前接語基 (Free-pre)
- 3) 単立・後接語基 (Free-post)
- 4) 単立・前接・後接語基 (Free-pre-post)

II 結合形式 (Bound form)

- 5) 前接語基 (Bound-pre)
- 6) 後接語基 (Bound-post)
- 7) 前接・後接語基 (Bound-pre-post)

なお、語基の種類には、以下の3種が考えられる。

- a) 既存のものを用いる〈既存語基〉
- b) 他から借用する〈借用語基〉
- c) 新たに造成する〈新造語基〉

また、出自から、和語語基、漢語語基、字音語基の3種が識別できる。

2. 資料の解題

『哲学字彙』は、近代語研究の第1級の資料として評価されている。すでに先行研究もあり、語彙索引も用意されている²⁾。ただ、書誌解題や語彙の概説的な報告はあるものの、語彙の内容に踏み込んだ訳語法や語構成と取り組んだ研究はみられない。

上述のように書誌の解題がすでにあるので、概略を記すにとどめる。初版(1881/明治14年)、2版(1884/明治17年)、3版(1911/明治44年)があり、本稿では初版を扱うが、適宜2版、3版も参照する。

初版の「緒言」には、井上哲次郎識とあり、英人・弗列冥^{フレミング}『哲学字典』により稿を起したが「近世之字」が不足しているので、諸書を検索し増補したという。また、訳語についても、先輩の訳字で妥当なものは尽く採用し、新たに訳字を下すものは『佩文韻府』『淵鑑類函』『五車韻瑞』などの他、儒仏の諸書をひろく参考にして定めたとしている³⁾。

なお、『哲学字彙』初版の見出し語数は、英語1951語、訳語数2,587語(いずれも異なり語数)である。

3. 語基の単位

前述のように術語集『哲学字彙』には、漢字1字で訳された語、漢字2字で訳された語、さらに漢字3字以上で訳された派生語、複合語があり、これらを造語要素である語基に分解すると、漢字1字の語基、漢字2字の語基に分けることができる。

先に示した語基の形式と用法にしたがって『哲学字彙』の語基を整理すると以下ようになる。

① 1字語の語基

A 自立形式 (Free form)

1) 1字漢語の単立語基 (F1-Free)⁴⁾

悪→悪 Bad 詞→詞 Word
信→信 Belief

1字語の漢語・漢語基(→現代語)、とくに1字の自立形式の和製漢語が新たに造られる可能性はきわめて少なく『哲学字彙』でも皆無である。このことは、先例となる近世の蘭学でも同様で、例外的に「腺」(「扁桃腺」)があり、よく知られている。

2) 1字漢語の単立と3字漢語の前接成分の二様に用いられる語基 (F1-pre-pre)

(『哲学字彙』に該当例なし)

3) 1字漢語の単立と3字漢語の後接成分の二様に用いられる語基 (F1-free-post)

心→心 Mind 功名→心 Ambition
系→系 System 神経→系 Nervous system

1字の単立後基「心」「系」は、既存のものであるが「心」に〈mind〉、「系」に〈system〉を当てたこと、これを接尾辞(post)として用いたのは英学の取り入れによるものである。

4) 1字漢語の単立と3字漢語の前接・後接成分の三様に用いられる語基 (F1-free-pre-post)

(『哲学字彙』に該当例なし)

B 結合形式 (Bound form)

5) 3字漢語の前接成分として用いられる語基 (B1-pre)

正→正-理論 Rationalism

中→中-名辞 Middle term

1 字の結合形式、つまり 3 字漢語の語頭に用いられる接頭辞（語基のレベルでは前接語基）としての用法である。

- 6) 3 字漢語の後接成分として用いられる語基 (B1-post)

下→形而-下 Concrete

法→弁証-法 Dianoiology

- 7) 3 字漢語の前接成分と後接成分の二様に用いられる語基 (B1-pre-post)

(『哲学字彙』に該当例なし)

② 2 字語の語基

A 自立形式 (Free form)

2 字語は、1 字語と違い新たな造語が可能である。明治期に新たに造られた和製漢語・語基はここに属する。

- 1) 2 字漢語の単立語基 (F2-free)

科学→科学 Science

暗指→暗示 Suggestion

会員→会員 Member

函数→関数 Function

概括→概括 Generalization

詭幻→神秘的 Mystery

『哲学字彙』に取り入れられた明治期の和製漢語には、この例のように現在では訳し換えられている語もある（カッコ内が現代の訳語）。なぜ、訳し換えられる語とそうでない語があるのであろうか。後に検討する。

- 2) 2 字漢語の単立語と 4 字漢語の前接成分の二様に用いられる語基 (F2-free-pre)

一統 Universal

一統-政治 Bureaucracy

確定 Definite

確定-名辞 Definite term

- 3) 2 字漢語の単立語と 4 字漢語の後接成分の二様に用いられる語基 (F2-free-post)

情操 Sentiment

主我-情操 Egoistic sentiment

命題 Proposition

肯定-命題 Affirmative proposition

- 4) 2 字漢語の単立語と 4 字漢語の前接・後接の三様に用いられる語基 (F2-free-pre-post)

哲学 Philosophy

哲学-修練 Philosophical culture

思弁-哲学 Speculative philosophy

断定 Judgment

断定-命題 Judgment proposition

解説-断定 Explicative judgment

B 結合成分 (Bound form)

- 5) 4 字漢語の前接成分の語基 (B2-pre)

相對-概念 Relative conception

固定-資本 Fixed capital

独裁-政治 Autocracy

- 6) 4 字漢語の後接成分の語基 (B2-post)

自然-神教 Deism

一妻-多夫 Polyandry

- 7) 4 字漢語の前接・後接成分の二様に用いられる語基 (B2-pre-post)

再現-智識 Intuitive knowledge

虚形-再現 Abstract representation

直覚-知識 Intuitive knowledge

総念-直覚 Intuitive

このように、幕末・明治期の英学の移入に際して、2 字の和製漢語が大量に生産された。そして、さらにこの 2 字語基に接頭辞・接尾辞を付した 3 字漢語、2 字語を組み合わせた 4 字漢語が生産された。

4. 語基の分布

『哲学字彙』の語基をこれまで示した方法で分類すると〈表 1〉のようになる。語基の総数は 2,070 である。これを語基の典拠によって「既存漢語基」「和製漢語基」及び「字音語基」に分けて示した。「既存語基」が 80.9% を占める。語として、また語基として過去の漢籍や和書に見えるものである。これを漢語の語基、和語の語基に分けると次のようになる。ほとんどが漢語の語基によって占められている。

1 字語の内訳 漢語基 80 和語基 4

2 字語の内訳 漢語基 194 和語基 4

『哲学字彙』語基の分布

(表1)

語基	自立語基 (Free form)				結合語基 (Bound form)			合計
	単立	単立・前接	単立・後接	単立・前・後接	前接	後接	前・後接	
既存語基	1,157	122	41	23	228	96	10	1,677 (80.9%)
和製語基	185	26	5	5	103	10	6	350 (17.0%)
字音語基	2	0	0	0	40	1	0	43 (2.1%)
合計	1,344	148	56	28	371	107	16	2,070 (100%)

「和製漢語」は、近世の蘭学、近代の洋学の翻訳がよてもたらされたものである。その意味で、既存語に対して和製漢語は「新語」である。すべて2字の漢語である。

『哲学字彙』中には蘭学の用語が17語、中国西学からの借用語が5語含まれている。のちに取り上げる。

この他、音訳語が43語(2.1%)ある。カタカナ語が氾濫する現代語からみると少ない。明治期の西洋語の受け入れの姿勢が翻訳主義にあったことが明確に示されている。

5. 既存語による語基の生成

翻訳とは、外国語を自国語に置き換える作業である。その際に、基本的にはすでにある語(既存語)で置き換えるか、また新しい語(新語)を造成して置き換えるかの二様があろう。

このことを既存語の側からみると次のことがいえる。

- その語がどの原語(洋語)と対応するか。
その既存語が、ある洋語と対応すると訳語になる。
- すでにある語を他の分野に転用する。
神学 Atheism
神道→キリスト教
理学 Science
朱子学→西洋哲学
- すでにある語に新しい意味を加えて用いる。
運動 Motion
天体の運動→身体の運動(=体操)
→ある範囲を動き回る
(=選挙運動)
- すでにある語を語基にして、新たに3字語、4字語を造る。

元子論 Monadology
細分子 Molecule
直接知識 Immediate knowledge
実形再現 Concrete representation

e) 他の外国語を借用する。

日本より一足先に開国した中国は、日本が英学を移入しようとした時には、すでに『英華字典』ができており、その訳語を『英和辞典』に取り入れたことなど、日本語では、中国西学用語を借用することが行われた。

6. 新たな語基の生成(和製漢語)

広義には、既存語による語基の生成も、新たな語基の生成に含めてよいであろう(前節5のb, c, d)。しかし、背後に既存の語(語基)があるのではないのでは、自ずと生成の方法が異なる。本稿では、この新たな語基の生成(いわば、狭義の訳語語基の生成)による和製漢語の語基を中心に論じる。既存語による語基の生成については、和製漢語の語基に関わりながら触れることにする。

7. 現存する和製漢語

幕末から明治期に、多くの和製漢語が造成されたことは知られている。本資料の『哲学字彙』の訳語の中にも、そうした和製漢語が含まれており、〈表1〉が示すように350語(17%)ある。しかし、短日時に、しかも〈哲学用語〉という抽象的な概念の訳語を確定するのは簡単なことではなかった。誤訳も含め、新たな情報によって訳し直された語も少なくない。資料の『哲学字彙』に限って言えば、初版(1881・明治14年)の訳語のうち、新たに造られた和製漢語の37.7%〈表2〉〈表3〉が後に訳し直され、初版の訳語は消滅(廃語)し

和製漢語・自立形式の語基 (Free form)

〈表2〉

	単立 (%)	単立・前接 (%)	単立・後接 (%)	単立・前接・後接 (%)	合計 (%)
現存	104 (56.8)	20 (76.9)	14 (93.0)	5 (100)	144 (62.3)
消滅	81 (43.2)	6 (23.1)	1 (6.7)	0 (0)	87 (37.7)
合計	185 (80.1)	26 (15.6)	15 (4.5)	5 (2.2)	231 (100)

和製漢語・結合形式の語基 (Bound form)

〈表3〉

	前接 (%)	後接 (%)	前接・後接 (%)	合計 (%)	単立・結合合計 (%)
現存	58 (56.3)	6 (60.0)	4 (66.7)	68 (57.1)	212 (60.6)
消滅	45 (43.7)	4 (40.0)	2 (33.3)	51 (42.9)	138 (39.4)
合計	103 (86.6)	10 (8.4)	6 (5.0)	119 (100)	350 (100)

ている。

どのような語・語基が残り、どのような語・語基が消滅したのであろうか。〈現存する語・語基〉と〈消滅した語・語基〉に分けて検討する。そこから、日本語の訳語法、造語法を指摘してみたい。

1 自立形式 (Free form)

自立形式の語基とは、それ自体が単独で語を形成すると共に、語を造る要素（語基）ともなるものである。

この語基は『哲学字彙』では、①単立で用いられ語基（単立語基〈F2-free〉）②単立と複合語の前部に用いられる語基（単立・前接語基〈F2-free-pre〉）、③単立と複合語の後部に用いられる語基（単立・後接語基〈F2-free-post〉）、④単立と複合語の前部・後部に用いられる語基（単立・前接・後接語基〈F2-free-pre-post〉）の4様がある。このうち、単立語基が80.1%を占める。しかし、現代語として今日も残っているのは60.6%で、4割が消滅していることになる。

はじめに、この現存語について個々にみていこう。なお、ここには和製漢語という観点から「蘭学から引き継いだ和製漢語」も含めている。近世の蘭学の訳語法が、近代の英語の訳語法にどのように生かされたか、また機能しなかったかを確認するためである。

1) 単立語基 (F2-free)

単立語基は、もっぱら単立で存在し、他の語基と接続して複合語を造ることはない。ただし、こ

のことは他の語基についても同様であるが、いうまでもなく、ここで扱う資料『哲学字彙』においてである。

① 近世蘭学の和製漢語

この単立語で現存する語の中には、蘭学から引きいた語が6語含まれている。

引力 → 引力 Attraction

鬱憂 → 憂鬱 Melancholy

元素 → 元素 Element

視覚 → 視覚 Sight

動力 → 運動量 Momentum

溶解 → 分解 Decomposition

蘭語の訳語をそのまま受け継いだものと、蘭語の訳と英語の訳が異なる「鬱憂」「動力」「溶解」がある。

◆鬱憂 → 憂鬱

初版・再版ともに「鬱憂」、3版は見出し語から「鬱憂」を削除している。現代語との差異は文字が転倒していることである。近世語から近代語に移行する際に、また中国語を借用する際にもみられる方法で、他にも用例多い。

たとえば、近世語から近代語への移行でみられる語（注『英和対訳袖珍辞書』から『英和字彙』）

計算 → 算計 Account

推論 → 論推 Analogism

誤謬 → 謬誤 Delusion

由来 → 来由 Derivation

乱暴 → 暴乱 Distractedly

憂鬱 → 鬱憂 Melancholic

中国語を借用するに際して、文字を転倒させた

と考えられる語（注、「英華辞典」から「英和字彙」）

旅行→行旅 Travel
平和→和平 Peace
肉筋→筋肉 Muscle
互相→相互 Mutual

などがみられる。

◆動力→運動量

◆溶解→分解

2語とも、現代語では訳し換えられている。

「動力」は、初版・再版とも「重力」(物)で、物理学用語としているが、3版では「運動量」と訳し換えられている。現代語は、この3版の「運動量」を採用したことになる⁵⁾。

「溶解」には、現代語では〈Dissolution〉を当て「分解」には〈Decomposition〉を当てる⁶⁾。

2語に共通するのは、語の履歴とでもいえるべきもので、実質的な内容に合わせた改訳である。蘭訳語から英語訳に限らず、英語訳でも明治初期の訳語から同20年以降の訳語にこうした現象がみられる。とくに、化学用語、物理学用語、天文学用語などの術語に多い。

② 近代英学の和製漢語

近代の英学の移入によって造られた和製漢語・語基で、現代語でもそのまま使われているもの(現存語)をみる。

会員	Member	義務	Duty
逆説	Paradox	現実	Actuality
困難	Difficult	志向	Intention
質量	Mass	触覚	Touch
時期	Period	需要	Demand
成果	Product	洗礼	Baptism
全知	Omniscience	存在	Existence
惰性	Inertia	妥当	Validity
展性	Expansibility	投票	Vote
特質	Characteristic	同化	Assimilation
動議	Motion	熱心	Enthusiasm
必要	Necessary	比率	Ratio
味覚	Taste	民法	Civil law
楽園	Paradise	理想	Ideal

(104語中28語)

◆逆説 Paradox

いまのところ、本資料『哲学字彙』が早い例である。初版・再版「逆説」、3版「逆理・逆説・如反説」とあり〈paradox〉の訳語としては「逆説」が残った。

◆全知 Omniscience

この語も本資料が早い。初版・再版・3版ともに「全知」を当てる。「全知全能」〈omniscient and omnipotent〉は、この時期にはまだ見えないようである。

◆惰性 Inertia

この語も、本資料の初版〈inertia〉の訳が早い。物理学用語として登録されている。今日でも物理学で「慣性・惰力」と共に「惰性」が使われ、さらに医学でも「惰性・無力(症)・緩慢」として「惰性」が採用されている。

◆動議 Motion

この語、本資料よりすこし早い翻訳小説『花柳春話』(1879)に見えるという。いずれにしても、この時期に訳語として造られた和製漢語と考えられる。『哲学字彙』では〈motion〉の訳として、初版「行動・動議(政)」,再版・3版「行動・動議(政)・運動(物)」を当てている。

◆志向 Intention

「志向」も(心の向かうところ)の意味で、中村正直訳『西国立志編』(1871)に見えるが、哲学用語の〈intention〉(意識が特定の対象に向けられること)の用法は『哲学字彙』が早い。初版・再版「志向」、3版「志向・意向」となっており、現代語では「意図・意向」が当てられる。

◆存在 Existence

「存在」の第一義である〈現にそこにある〉意味では、古く中国の古典に見える。ただ、西洋哲学の用語〈existence〉の訳語としての用法は、本資料の『哲学字彙』が早い。初版・再版・3版ともに「存体・存在・生物」で、現代語も踏襲している。こうした古語の転用は他にも見られ、訳語のひとつの方法として用いられたと考えられる。

◆投票 Vote

この語「投票」は『英和字彙』(1873)に見えるが〈いれふだ〉のルビが付いている。初版・再版・3版ともに「投票」(政)となっている。ル

びがないのでくいれふだ」と読んだかくトウヘウ」と読んだか、またくトウヒョウ」と読んだかは判断できない。ただ『公益熟語字典』(1873)にくトウヘウ」とあり『和英語林集成』3版(1886)にくTohyo トウヘウ」とあることから『哲学字彙』は、初版(1881)からくトウヘウ」またくトウヒョウ」と読んだ可能性はある。

いずれにしても、この「投票」は、現代語では「投票管理者」「投票期日」「投票立会人」「投票用紙」「投票区」「投票権」「投票箱」「投票率」「繰り上げ投票」「無効投票」「人気投票」など多くの複合語がある。これらの語は、「投票」が語基となって、新たに造られた語である。

◆同化 Assimilation

医学・植物学用語として『医語類聚』(1872)にくassimilation)の訳語として見えるが、本資料の『哲学字彙』では、これとは異なる今日の哲学での用法(本来は異なる、性質・様態・思想などが同じくなること)の意味で用いられている。初版・再版・3版とも「同化」(生)を登録している。

◆比率 Ratio

本資料『哲学字彙』が早い例である。初版・再版「比率」(数)、3版「比・比率」(数)となっており、早い時期に訳語が固定した。

◆民法 Civil

「民法」は、津田真道『泰西国法論』(1868)に見え、比較的早く固定する。初版・再版・3版ともに「民法」になっている。

この「民法」だけでなく、これまでみてきた「惰性・動議・投票・同化・比率」などの、いわゆる術語・専門語は、一般語に比べて固定しやすい傾向をもっている。初めは、限られた仲間のことば的意識が働くからであろう。一方の、一般語は、術語に比べて、意味や意味の背景が広いため解釈が統一しづらく固定するのに時間がかかるようである。しかし、ひとたび流布すると固定する。また「逆説・志向・存在・理想」などは、今日では、普通に用いられる一般語になっており、いずれも『分類語彙表』(初版・昭39)にある語であるが、明治期には専門性の高い術語として用いられた。少なくとも英語、中国語(漢語)を理解で

きる知識層のことばであったと考えられる。

2) 単立・前接語基 (F2-free-pre)

単立で用いられると共に、3字語・4字語の前接語基としても機能する語基である。

① 近世蘭学の和製漢語

ここでも、先の単立語基と同様、蘭学から引き継がれたものが3語ある。

・細胞(包) Cell

細胞-啓発論 Histogeny

細胞-化醇論 Histophyly

・衝動 Impulse

衝動-狂癡 Impulsive insanity

衝動-力 Impulsive force

・物質 Matter

物質-力 Physical force

◆細胞 Cell

細胞-啓発論 Histogeny

細胞-化醇論 Histophyly

「細胞」は「細包」と書いた。宇田川榕庵が『植学啓原』(1833)で蘭語〈cel〉の訳語に用いたのが初出である。この「細包」を語基に、英語の訳語「(細胞)-化醇論」「(細胞)-啓発論」を造成した。これは「細包」にく化醇論)〈啓発論)を後接して複合語を造ったものである(「化醇」は〈evolution)の訳。現在は「進化」と訳し代えられている)

◆衝動 Impulse

衝動-狂癡 Impulsive insanity

衝動-力 Impulsive force

蘭語「衝動」を語基とした英語の4字訳語「(衝動)-狂癡」、同じく接尾辞「力」を付けた3字語「(衝動)-力」を造成している。前者は2字語基を後接した語、後者は1字語基を後接した複合語である。

◆物質 Matter

物質-力 Physical force

蘭語「物質」を語基に接尾辞「力」を付して、英語の訳語「物質-力」を生成した。

② 近代英学の和製漢語

近代になって、英語の翻訳によって生成された和製漢語をみる。

- ・科学 Science
科学-修練
- ・外延 Extension
外延-分量
- ・蓋然 Probable
蓋然-性
- ・拒否 Negation
否定-断定
- ・肯定 Affirmation
肯定-命題／肯定-名辞
- ・進化 Evolution
進化論 Theory of evolution
- ・全称 Universal・特称 Particular
全称-断定／全称-名辞
- ・内包 Intension
内包-分量
- ・派生 Derivation
派生-不善／派生-要素
- ・煩瑣 Subtlety
煩瑣-理学

(16 語中 10 語)

◆科学〈Science〉

科学-修練 Scientific culture

初版・再版は「理学・科学」となっており「理学」が〈science〉の訳語の初めに置かれている。それまでは「理学」「学」と訳されていた。「科学」は、本資料の『哲学字彙』初版が早く〈science〉の訳語として当てた⁶⁾。これに加えて初版に「科学修練」も登場する。ただ「修練」は漢籍の語である。したがって「科学修練」は、新造の語基と既存語基の複合という造語様式になる。

この「科学」が、3 版になると、単立・前接だけでなく、後接語基としても多くの用例を挙げている。

経験-科学 experience science
精神-科学 Mental science
自然-科学 Natural science
規範的-科学 Normative science

実理-科学 Positive science

科学-者 Scientist

このころから「科学」が語基となって大量の複合語を造っていることがわかる。現代語には、この「科学」が、前接、後接の語基となった語がきわめて多い。このようにみえてくると、明治期は和製漢語という新語を造成したというより、新しい〈語基〉を生産した時期というほうが適切である。

◆外延 Extension

外延-分量 Extensive quantity

初版・再版・3 版ともに〈extension〉に「延長・広袤・容性(物)・外延(論)」を当て「外延」を論理学用語としている。そして「外延」を語基として「外延分量」を挙げる。「外延」は、西周の『致知啓蒙』(1874)に〈extension〉の訳語として登場するのが初出で、本書『哲学字彙』に採用れて普及する。

◆蓋然 Probable

蓋然-性 Probability

初版・再版は、この 2 語だけを挙げているが、3 版では、蓋然-論 probabilism・蓋然-演繹 probable deduction・蓋然-誤差 probable error・蓋然-推論 probable inference の前接例を挙げている。4 字語は、論理学の用語である。「蓋然」は、今のところ、本資料の『哲学字彙』が早い例である。現在の〈probability〉の訳は、哲学用語「慨然」、数学用語「確立」としている。

◆拒否 Negation

拒否-断定 Negative judgment

「拒否」も、この期に訳語として造られた和製漢語である。本資料『哲学字彙』が早い例である。初版・再版・3 版とも〈negation〉に「拒否・否定」を当てている。なお〈negative〉は「説的・反面的」となっている。

◆肯定 Affirmation

肯定-命題 Affirmative proposition

肯定-名辞 Positive term

「肯定」は、西周『致知啓蒙』(1874)が、英語〈affirmative〉の訳語として「否定」に対して用いた造語である。なお、「否定」〈negation〉も、西周『学原稿本』(1869)の造語とされている。「否定命題」〈negative proposition〉・「否定命辞」

〈negative term〉が『哲学字彙』に見える。

◆進化 Evolution

進化論 Theory of evolution

この「進化」は、日本に「進化論」を紹介した加藤弘之の造語『人権新説』(1882)といわれる。本資料では、初版・再版は〈evolution〉に「化醇・進化・開進」、3版は「進化・発達」を当てている。「化醇」は漢籍の語で、3版から消え「進化」に定着した。

◆全称 Universal

全称-断定 Universal judgment

全称-名辞 Universal term

◆特称 Particular

特称-断定 Particular judgment

特称-命題 Particular proposition

ともに、西周『致知啓蒙』(1874)の造語。「全称」を「特称」〈particular〉に対して用いた。「全称」は、初版・再版〈universal〉「一統・普遍・全称(論)」,3版「一統・普通・全般・全称(論)・世界的」を訳語としている。現代の訳も、論理学用語として「全称的な・全称命題〈universal〉」を挙げている。「特称」の方は、初版「特異・特称」、再版「特異・特称(論)・特殊」、3版「特異・特称(論)・特殊・特称命題〈particular proposition〉」となっている。現代語訳も「特称的な・特称命題」とそのまま残っている。

◆内包 Intension

内包-分量 Intensive quantity

「内包」が「外延」〈extension〉に対する用法で、西周の『致知啓蒙』(1874)に出てくるのが早い。『哲学字彙』もこれを継承する形で登録し、初版・再版・3版ともに「内包」(論)を当てている。現代語でも、論理学では、そのままこの語を採用している。「内包」は、論理学用語として早くから定着した。

◆派生 Derivation

派生-不善 Derivative evil

派生-要素 Derivative factor

「派生」も『哲学字彙』が早い。初版・再版・3版ともに「派生・旁出・由来」を当てている。なお、このうち「旁出」だけが、今日の一般的な国語辞典では廃語になっているが、漢籍に典拠をも

つ語である。「派生」は、早くから語基としての機能も発揮し、後接語基を従えて3字語、4字語を生成してきた。

◆煩瑣 Subtlety

煩瑣-理学 Scholasticism

「煩瑣」も明治期に造られた和製漢語で、本資料『哲学字彙』が早い。初版・再版「煩瑣」、3版「煩瑣・煩悉・煩密・精細・伶俐・狡猾」となっている。

ここで挙げた語は、例外を除けば、初版・再版・3版ともそれほど大きな変動はなく、早い時期に訳語が定着している。これは、論理学・哲学といった分野の専門語が多いことによるだろう。

3) 単立・後接語基 (F2-free-post)

単立で用いられるとともに、後接語基となって4字語を造成する語基である。

現存する語基が13ある。このうちに、蘭学から引き継がれた語が1語含まれている。

① 近世蘭学の和製漢語

◆結合 Combination

観念結合 Combination of ideas

蘭書『舎密開宗』(1847)が早い。明治に入り、洋学者に使われ一般化した。初版・再版・3版とも「結合」「観念結合」を挙げている。なお「観念」は、古くからの仏教語であるが、西周が〈idea〉の訳語に当てて、哲学上の新しい意味を加えた転用語である。

② 近代英学の和製漢語

・原因 Cause

期成-原因／不定-原因

・前提 Premise

小-前提／大-前提

・分化 Differentiation

分化-体形／分化-体用

・名辞 Term

大-名辞／絶対-名辞

・命題 Proposition

肯定-命題／全称-命題

- ・要素 Factor
派生-要素／本来-要素
- ・理証 Certainty
通常-理証／有形-理証

(13 語中 7 語)

◆原因 Cause

- 期成-原因 Efficient cause
- 不定-原因 Occasional cause

西周『百一新論』(1874)の用語。その後、洋学者に用いられ、本資料『哲学字彙』初版(1881)、国語辞典『言海』(1886)に登録され定着した。

初版・再版では「原因・縁故・元由・本源」を当て、他に「原因」を後接語基にした4字熟語が9語みえる。また、3版では4字熟語が30語も挙げている。さらに、現代語では前接語基とした語(例「原因-不明・原因-解明」など)も多く、語基としての機能性がきわめて高い。

◆名辞 Term

- 大-名辞 Major term
- 絶対-名辞 Absolute

本資料『哲学字彙』初版が早い。西周・井上哲次郎・中村正直の著作にも見えないようである。『哲学字彙』は、初版「名辞」(論)、再版「語・名辞」(論)・開期(政)・学期」を当てる。また「名辞」を後接にする4字熟語が、上記に挙げた他に、初版・再版28語、3版43語みえる。そして、これらの大部分が現代語に受け継がれている。3版は、1912(明治45年)に出ているので、この期までに「名辞」を用いる熟語は、大部分できていると考えられる。

◆命題 Proposition

- 肯定-命題 Affirmative proposition
- 全称-命題 Universal proposition

西周『百学連環』(1871頃)が初出。本資料『哲学字彙』初版に〈proposition〉の訳語として取り入れられ固定した。この語も、先の「原因・名辞」とともに、語基としての機能性が高く『哲学字彙』の初版に、すでに4字熟語の後接語基に20例がみえる。初版・再版・3版「命題(論)」、ただし、3版の熟語は27語と増えている。ここに見える語も、そのほとんどが現代語に残っている。

◆要素 Factor

- 派生-要素 Derivative factor
- 本来-要素 Original factor

この「要素」も、本資料『哲学字彙』初版が早いようである。現代語では「要素」は、学術用法(一般語としても)、法律用語、数学用語というように使われる。このうち、学術が早く『哲学字彙』を典拠とする。ただ、この用法が確立したのは、明治後期の3版の刊行(1912.明治45年)に近い頃と考えられる。再版(1884.明治17年)の出た頃は「元素・原素」とともに使われた。

主なものを確認した。この他に、ここに属する語・語基は、整合 Consistence／前提 Premise／断言 Conclusion／偏在 Omnipresence／保存 Conservation がある。

4) 単立・前接・後接語基 (F2-free-pre-post)

この項に属するのは5語(語基)である。このうち、蘭語から受け継がれた語が1語ある。

① 近世蘭学の和製漢語

◆感覚 Sensation

- 感覚学 Pathology
- 普有-感覚 Caenesthesia

蘭学辞書『訳鍵』(1805)に「Verstand 才能 思慮 感覚 達人」とある。これが、幕末・明治初期の英和辞典〈Sensation Sense〉の訳語として引き継がれた。また、明治初期の洋学者の訳書や『明六雑誌』(1874)に用いられ、本資料『哲学字彙』再版(1884.明治17)が出たあたりで訳語として固定したと考えられる。

② 近代英学の和製漢語

- 概念 Concept
- 原理 Principle
- 哲学 Philosophy
- 動産 Movables

◆概念 Begriff / Concept

- 概念-論 Conceptualism
- 相対-概念 Relative conception

〈Begriff〉はドイツ語。西周が『致知啓蒙』

(1874)で〈notion〉を「概念」と訳したのが早い。『哲学字彙』初版・再版は〈Begriff〉〈Concept〉に「概念」を当てる。また、前接の3字語として「概念-力 Conception／概念-論 Concep-tualism」が、後接の4字語として「錯繆-概念 Complex conception／幽隠-概念 heuristic conception／明顕-概念 Ostensive conception／確實-概念 Positive conception／折服-概念 Privative conception／相對-概念 Relative conception」が見える。3版では、ドイツ語訳に「概念-発達 Begriff」が、英語訳に新たに「混合概念 Mixed concept／純粹-概念」が加わり、「錯繆(→複雑)-概念／折服(→欠損)-概念」が、それぞれ訳し直されている。(→)訳し直された語

◆原理 Principle

原理-学 Archology

原理-統一 Universal principle

西周「知説」(『明六雑誌』22号1875)の用語。『哲学字彙』初版・再版〈Principle〉の訳語として「道・原理・主義」と登録されているが、明治30年以前は用例が他にないようである。ただ、3版になると「原理」を後接語基とする4字語「原理-原則 Principle／根本-原理 Fundamental principle／内包的-原理 Immanent principle／主要-原理 Leading principle／先驗-原理 Trans-cendental principle／一統-原理 Universal principle」など12語も見える。3版が刊行された1912(明治45年)頃には「原理」は〈principle〉の訳語として、また4字語の語基としても確立していたと考えられる。

◆哲学 Philosophy

哲学-士 Philosopher

思弁-哲学 Speculative philosophy

「哲学」については、すでに報告したことがあり、簡単に触れるにとどめる⁸⁾。「哲学」の初出は、西周『百一新論』(1874)とされる。なお、儒学の用語に「希哲学」があり、これを中国西学が〈Philosophy〉の訳語として転用したものが日本語に入り、さらにこれを変形(「希」の省略)を経て「哲学」とした。

『哲学字彙』の初版・再版は「哲学」の他、以下の4字熟語を載せている。

独断-哲学 Dogmatic philosophy
 経練-哲学 experience philosophy
 実験-哲学 Positive philosophy
 実践-哲学 Practical philosophy
 思弁-哲学 Speculative philosophy
 総合-哲学 Synthetic philosophy
 思考-哲学 Theoretical philosophy
 超絶-哲学 Transcendental philosophy

ただ、〈Philosophy〉を「理学」とする語も見られる。

批評-理学 Critical philosophy
 実践-理学 Practical philosophy
 懐疑-理学 Sceptical philosophy

こうした語が9語ある。しかし、3版では「理学」は姿を消し「哲学」を語基とする3字語、4字語が30語におよぶ。

◆動産 Movables

動産-性 Immutability

不-動産 Immovables

大井健太郎訳『仏国政典』(1873)に見えるという。その後、訳書に散在し、明治29年(1896)の「民法」に使われている。一方「不動産」は『講学余談』(1877)が早いようである。上記の「民法」にも見える。

本資料『哲学字彙』は、初版・再版・3版ともに「〈movables〉動産(法)」〈「immovables〉不動産(法)」と同じである。訳語としては、ともに早くから固定していたと考えられる。

II 結合形式 (Bound form)

結合形式の語基とは、単立で用いられることなく、3字語、4字語、5字語、またそれ以上の熟語の要素として用いられる語基のことである。この語基には、『哲学字彙』において、3字以上の語の①前部のみに用いられる語基(前接語基〈B-pre〉)、②後部のみに用いられる後基(後接語基〈B-post〉)、③前部・後部の両方に用いられる語基(前接・後接語基〈B-pre-post〉)の3様がある。3つのうち、①前接語基が、もっとも多く55語基ある。他は、②後接語基4 ③前接・後接4語基である。

5) 前接語基 (B2-pre)

② 近世蘭学の和製漢語

蘭語から英語訳に引き継がれた前接語基が3語含まれている。

還元-法 Reduction

有機-体 Organism

固定-資本 Fixed capital

◆還元-法 Reduction

蘭書『舎密開宗』(1847)に〈Reductie〉の訳語として用いられた。また〈列儒苦知阿〉「還元法」と訳した。中国語では「提炼・提淨実・復原」などが見えるが「還元」はない。蘭学がもたらした和製漢語ということになる。『慶応再版英和对訳辞書』(1867)や『理化新説』(1869)に見え、早くから英語の訳語として固定したと考えられる。

◆有機-体 Organism

有機-体論 Biogeny

有機-体-化醇論 Phylogeny

有機-体-啓発論 Ontogeny

「有機」を語基にした熟語が4語登録されている。「有機」は、三崎 輔訳『舎密局開講之説』(1869, 蘭人・ハラタマの講演録の訳)が早いようである。「有機体」の方は『英和字彙』(1873)〈Organic bodies〉の訳が早い。現代語では「有機」を語基とした3字語, 4字語が大量に見られ, 高い造語機能をもっている。

◆固定-資本 Fixed capital

「固定」蘭書『舎密開宗』(1847)の用語。「資本」は、古く漢書に見えるが〈もと, もとで〉の意味, これを『哲学字彙』初版が〈capital〉の訳語として採用した。(『日本国語大辞典』「資本」の項〈語誌〉)

蘭語の語に漢書の語の意味を転用して組み合わせ4字熟語を造成した例。和製漢語の造成法の一つである。

② 近代英学の和製漢語

感受-性 Susceptibility

慣用-法 Common law

活力-論 Vitalism

共産-論 Communism

睡眠-術 Hypnotism

受動-的 Passive

説不-的 Negative

創世-記 Genesis

統計-学 Statistics

反省-力 Reflective power

福音-書 Gospel

唯神-論 Spiritualism

唯物-論 Materialism

圧政-政治 Despotism

独裁-政治 Autocracy

立憲-政治 Constitutional government

確實-概念 Positive conception

教会-律令 Ecclesiastical law

主我-発動 Self-regarding act

資料-虚偽 Material fallacy

(55 語中 20 語)

◆感受-性 Susceptibility

「感受性」は『哲学字彙』初版(1881)が早い。3版では〈Susceptibility〉に「易感性」も加わるが, この方は廃語になっている。なお, 1880代の終わりになると「感受」も現れ, 単立語にもなるが, 現代語では, この「感受性」以外に合成語はないようである。

◆慣用-法 Common law

この「慣用法」も『哲学字彙』が早く, その後に「慣用」が現れるようである。この方は「慣用音」「慣用句」「慣用手段」「慣用読」などが現代語にみえる。語基としての機能性が高い。

◆共産-論 Communism

現代語では「共産主義」で固定されている。「共産論」から「共産主義」への改訳は明治10年代の中ごろ(1886『仏和法律字彙』が初出・注『日国大』)のようである。なお「共産」が単立で用いられるのは1900年代に入ってからである。3版の訳には「共産主義」と共に「共有主義」も見える。この「共産」にも多くの合成語がある。

◆受動-的 Passive

「受動」が「能動」の対義語として単立で用いられるのは「能動」と共に, 本資料より『小学日本文典』(1874)の方が早い。ただ, この「受動」

の派生語「受動的」は、本資料の『哲学字彙』初版が早い。また「受動」の派生語は「受動者」「受動性」「受動態」のように例があるが、現代語には2字漢字の語基が連なる複合語（注、複合語の定義）は見当たらない。3版には「受動的」に加えて「受感的」がみえるが、この方は現代語では廃語になっている。

◆唯物論 Materialism

対義語の「唯神論」〈Spiritualism〉と共に『哲学字彙』初版が早い。ただ、この両語が一般化するのには1890年に入ってからのようである。3版には「物質論」もみえるが、この方は一般化しなかった。

以上、3字語のうち結合形式の和製漢語の主なものをみてきたが、特徴的なのは、2字語基が先にあってそれに接尾辞が付いて3字語が生成されるのが普通であるが、そうではなく、初めに3字語ができ、後に接尾辞が取れて2字の単立語（単立語基）ができるという経過をとることである。今、見た「感受性」「慣用法」「共産論」「受動的」「唯物論」のすべてが、この方式によるものであった。明治初期の訳語法のひとつとして特記できるのではないか。

次に4字語をみてみよう。前部の2字語が新たに生成された和製語基である。

◆独裁-政治 Autocracy

「独裁」が日本語に登場するのは1860年代の終わり頃で、本資料の『哲学字彙』初版（1881）の出た前後には、単立語でも洋学者の文章に散在する。ただ「独裁政治」の4字語で見えるのは本資料が早い。

◆主我発動 Self-regarding act

「主我」が単立で登場するのは1890年代の終わり頃である。この「主我発動」が本資料に見える10年近く後のことである。「主我-発動」が先に現れ、後に「主我」が単立語として用いられるようになったと考えられる。ただ、本資料の2版、3版から「主我発動」は消え、現代語にも見えない。

◆立憲政治 Constitutional government

「立憲」は、福沢諭吉訳『英国議事院談』（1969）に登場するのが早いようである。本資料初版が出

た頃は「立憲」が単立で固定していたと考えられる。「立憲政治」が登場するのはその後である。

4字の和製漢語も、3字の和製漢語と同様、4字語が登場した後、前部の2字語基が独立して単立語が生成される例が見える。

以上、結合形式のうち前接語基〈B.per〉58語の主なものを見てきたが、ここで扱う残りの、後接後基〈B.post〉4語、前接・後接後基〈B.pur-post〉4語については、少数なので総括して示す。

6) 後接語基 (B2-post)

加爾多-教派 Cartesianism（現代訳、デカルト）

世界-現状 Cosmography

一夫-多妻 Polygamy

一妻-多夫 Polyandry

（4語中4語）

◆加爾多-教派 Cartesianism

「教派」は、中村正直訳『西国立志編』（1871）や福沢諭吉『文明之概略』（1875）に出てくるのが早い。この期に訳語によって造られた和製漢語と考えられる。なお、参考までに「加爾多」は〈デカルト〉のことである。現代語では〈デカルト学派〉ということになる。

7) 前接・後接語基 (B2-pre-post)

- ・偶有-虚偽 Fallacy of accident
- 偶有-定義 Accidental definition
- 偶有-性 Accident
- 偶有-力 Incident force
- 可離-偶有 Separable accident
- 不可離-偶有 Inseparable accident
- ・再現-智識 Representative knowledge
- 再現-力 Representative power
- 虚形-再現 Abstract representation
- 実形-再現 Concrete representation
- ・直覚-知識 Intuitive knowledge
- 直覚-力 Anschauung/Intuition
- 直覚-的 Noetic
- 総念-直覚 Intuitive notion

- ・表現-知識 Presentative knowledge
 - 表現-力 Presentative power
 - 表現-的 Presentative
 - 灼著-表現 Clear presentation
- (4 語中 4 語)

- ◆偶有-虚偽 Fallacy of accident
- 偶有-性 Accident
- 可離-偶有 Separable accident

この「偶有」は本資料『哲学字彙』初版が早い。ただ、現代語では「偶有性」はあるものの「偶有虚偽」や「可離偶有」は見えない。

- ◆再現-知識 Representative knowledge
- 再現-力 Representative power
- 実形-再現 Concrete representation

「再現」は、本資料『哲学字彙』初版が早い。その後、多くの複合語を生成し、今日では基本語彙として用いられる。

- ◆直覚-知識 Intuitive knowledge
- 直覚-力 Anschauung / Intuition
- 総念-直覚

「直覚」は、西周『致知啓蒙』(1874) が早いようである。ただ、現代語では、哲学用語としては「直観」、一般用語としては「直感」が用いられる。そのため「直覚」は、あまり発展しなかった。

後接語基 <B.post>

- ◆世界-現状 Cosmography

「現状」が単立語で現れるのは、明治 20 年代のようである。本資料の「世界現状」は結合形式の複合語であるが「現状」の使用の早い例と考えられる。

8) 廃語となった和製漢語

見てきたように『哲学字彙』には、この期に造られた多くの和製漢語が含まれている。しかし、それらの語のすべてが現代語として残っているわけではない。以下で、そうした現代は消滅してしまった語を検討する。近代日本語の訳語法、造語法を明らかにするために重要である。

- ① 『日本国語大辞典』に登録されているが、一般の国語辞典にはなく、英和辞典では訳

し代えられている語

ここで扱う語は『哲学字彙』の訳語で、現代は『日本国語大辞典』(2 版) には登録されているが、一般の国語辞典には見えず、また英和辞典では訳し代えられている語がある。

『日本国語大辞典』は、現代では消滅した語でも過去の文献の解説に役立つよう配慮されており、現代は消滅した語でも主なものは登録している。その点、一般の国語辞典、及び英和辞典は現代語に限っている。したがって、明治初期の一時期『哲学字彙』に登録されたものの、生き残れなかった語である。

実質的な内容に沿わなかった訳語、誤訳の訂正など、内容に起因する訳し代えや、あるいは日本語の語法や難解過ぎる漢字に起因する理由で訳し替えられたと考えられる。この点についても触れて議論を進めてゆきたい。

I 自立形式 (Free form)

1) 単立語基 (F2-free)

- 炎情 (→ 熱中) Enthusiasm
- 覚性 (→ 感覚) Sense
- 函数 (→ 関数) Function
- 帰無 (→ 絶滅) Annihilation
- 強圧 (→ 威圧) Coercion
- 驚慌 (→ 恐慌) Panic
- 敬体 (→ 挨拶) Salutation
- 現示 (→ 暴露) Revelation
- 工銀 (→ 賃金) Wages
- 公準 (→ 公理) Postulate
- 時例 (→ 場合) Case
- 星学 (→ 天文学) Astronomy
- 静学 (→ 静力学) Statics
- 性法 (→ 自然法) Natural law
- 存体 (→ 存在) Existence
- 定知 (→ 確信) Certainty
- 適格 (→ 資格) Qualification
- 藩民 (→ 野蛮人) Savage
- 遍通 (→ 充満) Pervasion
- 弁破 (→ 論破) Refutation

容性 (→ 伸張) Extension
予察 (→ 仮定) Presumption
力行 (→ 実行) Practice

(80 語中 23 語)

◆炎情 <Enthusiasm> → 熱中

両者とも心の作用であり、「炎」は「熱」に通ずる。ただ、再版では「熱心・炎情」の順で登録され、3版では「熱心・熱情・炎情」の順となって「炎情」は残っているが <enthusiasm> の第 1 義ではなくなっている。

◆覚性 <Sense> → 感覚

「覚性」は、本資料『哲学字彙』の訳語で、その後の使用例はあまりない。「感覚」に取って代わられると共に、現代はカタカナに変換され「センス」が盛んに使われる。

◆函数 <Function> → 関数

「函数」も『哲学字彙』が早い。初版・再版「作用・官能・函数(数)」, 3版「機能・官能・作用・函数(数)」となっており、数学用語として早くから固定している。最近は「関数」と書く。

◆帰無 <Annihilation> → 全滅・絶滅

再版・3版では「絶滅・帰無・寂滅」の順序になる。現代語では「帰無仮説」しかなく、「帰無」が単立で使われることはない。「無二帰ス」では名詞+動詞 <N-V> を基本とする日本語の構造にはなじまないのであろう。

◆強圧 <Coercion> → 威圧

◆驚慌 <Panic> → 恐慌

いずれも現代の訳では、前部の文字が入れ替わり、強調化されている。

◆敬体 <Salutation> → 挨拶

「敬体」今は <丁寧な表現様式> の意味でしか使わない。初版・再版「敬体・?節」, 3版ではこれに現代の英和辞典の訳と同じ「挨拶」が加わる。明治後期に <salutation> の訳語として「挨拶」が固定されたものと考えられる。

◆工銀 <Wages> → 賃金

「工銀」の早い例は、中村正真訳『西国立志(1870)』に見えるが、その後の使用例は『哲学字彙』以下ではあまりない。現代の英和辞典、及び一般の国語辞典に「工銀」は見えなくなっている。

「工銀」は中国語の「工作」(「労働」の意味) からきたものか。再版も「工銀」で初版と同じだが、3版では「労銀・賃金」となり「賃金」が登場する。<wages> の「工銀」から「賃金」への訳語の変更は、明治の後期と考えられる。

◆公準 <Postulate> → 公理

本資料『哲学字彙』が早い。次いで、今井恒郎訳『哲学階梯』(1887) にも見えて、訳語で論理学・数学用語として登録されている。初版・再版・3版ともに「公準」で、現代の「公理」の訳は見えない。

「公理」そのものは、室町の和書に用例があるが、論理学・数学の術語としての用法は、本資料の『哲学字彙』3版(1912)以後で、大正期に入ってからであろう。訳語の生成法としては、既存語に新しい意味を付加して用いる転用の例になる。

◆時例 <Case> → 事例

英和辞典での <case> の第一義は「場合」で和語であるが「事例」も見える。「時例」の用例は、本資料以外に見つからないようである。一方の「事例」は古い漢籍の語で、和書でも古くから見える。初版・再版「時例・情景・形勢」, 3版「時例・案件・事件・情景・形勢・境遇・転機・場合」とある。3版に「場合」(混種語)が見えるのが注目されるが、現代語の「事例」は見えない。

「時例」は <その時々> の例で意味が狭くなる。「事例」は <時々> の制約がはずれ広く用いられよう。この例も、先の「公準」から「公理」への転換と同じ訳語生成の経過をたどり、その時期も大正期になるようである。

◆星学 <Astronomy> → 天文学

「星学」は蘭学の語彙で『訳鍵』(1810)に蘭語 <starrekijker> の訳語として見える。その後『英和対訳辞書』(1862)や、村田文夫の『西洋見聞録』(1871)で、英語 <astronomy> の訳語として「星学」が用いられた。

初版・再版「星学」, 3版「星学・天文学」で、現代の「天文学」が当てられている。なお、この3版(1912)より早く、知足蹄原子『布令弁』(1868-72)に <星学 セイガク テンモンガク> とある。なお『言海』(1886)は、まだ「星学」

である。

◆「静学」(Statics) → 「静力学」,

西周が『百学連環』(1871)で〈statics〉の訳語として用いた。これを本資料の『哲学字彙』初版が〈statics〉「静状論(世)・静学(物)」として登録した。「星学家・星学者」の3字語もあった。なお、現代語で〈経済学〉が用いる「静学」は別個のものである。この〈statics〉の訳も、現代は「静力学」と訳し替えられている。再版「静状論・静学」, 3版「静学」となっており, 3版では「静状論」が消えている。

しかし、現代語の「静力学」は出てこない。「静状」「静状論」とも『日本国語大辞典』(2版)にも見えない。「静力学」の早い例は、野村竜太郎の『工学字彙』(1886)であるから『哲学字彙』の再版(1884)の後ということになる。

◆性法〈Law of nature〉 → 自然法

「性法」は、西周『万国公法』(1868)が早い。また、神田孝平に『性法略』(1871)の書名の訳書がある。『哲学字彙』では、初版・再版「性法・万有法」, 3版「性法・万有法・自然法」となっており, 3版に現代訳の「自然法」が登場する。明治期には〈nature〉に「本性・性」を当てており「性法」の「性」は「自然」の意と解釈できる。ただ「性法」は『哲学字彙』は3版まで登録しているが、他の用例では、明治10年以前の訳書に見えるだけで、洋学者の一部にしか通用していなかったのではないかと考えられる。「自然法」の登場によって廃語になったと考えられる。

◆存体〈Existence〉 → 存在

「存体」は、本資料『哲学字彙』初版が早い。他に用例があまりない。また、現代の一般の国語辞典、英和辞典の〈existence〉の訳語中にも「存体」は見えない。『哲学字彙』では、初版・再版・3版とも「存体・存在・生物」を当てている。しかし、「存体」は、洋学者の一部で用いられたが、明治の後期には「存在」が勢力をもつようになり、「存体」は消滅したものと考えられる。

◆藩民〈Savage〉 → 野蛮人

〈savage〉の名詞用法は、野蛮人・未開人・無作者者などである。人間理解という意味で時代性を感じる。3版は「藩民・野蛮人」となっ

ている。

◆容性〈Extension〉 → 伸張

「容性」は、明治6年の『小学読本』(1873)に〈容積は充性、又容性と称す〉と出てくる。『哲学字彙』では〈extension〉の訳語として、初版・再版・3版ともに「延長・広*・容性(物)・外延(論)」を当てている。「容性」は、物理学用語となっている。「外延」は、現代でも論理学用語として用いられるが、「容性」の方は国語辞典にも英和辞典も見えない。

以上は、『哲学字彙』の訳語のうち、現代語では、一般の国語辞典には見えず、英和辞典の訳語としても訳し代えられているものである。初版に現代語訳が見える場合もあるが、3版になると、さらにその数が増えることがわかる。『哲学字彙』の訳語は、哲学用語にとどまらず、広く理系の用語も含む術語集である。しかも、初版・再版・3版と、近代語の成立を目指す激動の時期の訳語の成長、発展の過程を見ることができる。

2) 単立・前接語基 (F2-free-pre)

- ・ 説正 Positive
説正-的 Affirmative
- ・ 定道 Predestination
説正-論 Determinism
- ・ 普有 Common
普有-感覚 Caenesthesia
普有-名辞 Common term
普有-性 Community
- ・ 想考 Hypothesis
想考-哲学 heoretical philosophy

(7語中4語)

◆説正〈Positive〉 → 肯定

説正-的 Affirmative

〈肯定〉の意味で本資料『哲学字彙』が〈positive〉の訳語に用いたのが早い。〈説不〉(「肯定」の意)と対義語になっている。共に、現代の一般の国語辞典には見えない。

初版「説正・正面」, 再版・3版「説正・正面・陽状」。3版まで「説正」が見える。哲学用

語用語としての現代訳は〈実証的〉が一般的であろう。ちなみに〈affirmative〉は、論理学では「肯定・命題」と訳される。

◆定道〈Predestination〉→運命

定道論 Determinism

「定道」は、本資料『哲学字彙』が早い。初版・再版「定道」、3版「定命・預定」となり、3版では「定道」が消えている。現代語では「運命・宿命」と訳される。また「定道論」の〈determinism〉も哲学で「決定論」と訳され、現代の国語辞典から「定道」は消滅している。

◆普有〈Common〉→共有

普有-感覚 Caenesthesia

普有-名辞 Common term

普有-性 Community

この「普有」は『日本国語大辞典』を除けば、現代では国語辞典も英和辞典も登録していない。本資料『哲学字彙』以外の使用例も、ほとんど見当たらないようである。ただ、この「普有」の語基としての機能は高かったようである。

現代の〈common〉の訳は「共通の・共有の」が基本である。初版・再版「普有・平凡・尋常・普通」で、3版ではこれに「共通」が加わった。このうちから「普有」が消えたことになる。

◆想考〈Hypothesis〉→仮定

想考-哲学 Theoretical philosophy

本資料の『哲学字彙』の用語。他に用例が見つからないようである。初版・再版「憶説・想考・意見・立論」、3版「憶説・臆断・想考・意見・立論・仮説・憶料・憶度・意度・憶想・仮定」と多くの語が追加されている。その中に、現代の第一義の訳語「仮説」（仮定）が見える。こうした中で「想考」は、現代では国語辞典にも英和辞典の訳語としても使われなくなっている。また、熟語「想考哲学」も見えない。

3) 単立・後接 (F2-free-post)

◆理証〈Certainty〉→確実

直接-理証 Immediate certainty

間接-理証 Mediate certainty

無形-理証 Metaphysical certainty

通常-理証 Moral certainty

『哲学字彙』初版・再版は「的質・切当・定知」と共に「理証」を訳語とし登録している。また、3版はこれに「確実・的確・的実」の3語を加えている。それと共に3版まで「直接理証」以下の「理証」を後接語基とする5語の複合語が見える。

ただ、この「理証」は、本資料『哲学字彙』を初出とするものの、その後は使われず、現代語では廃語となっている。

現代語は〈Certainty〉の訳として「確実・確信」を当てる。

4) 単立・前接・後接 (F2-free-pre-post)

該当する語基なし

II 結合形式 (Bound form)

5) 前接語基 (B2-free-pre)

合接-的 Conjunctive (→接合)

殺滅-法 Elimination (→消去法)

説不-的 Negative (→否定的な)

全成-力 Perfection (→完成)

督制-系 Regulating system (→支配体制)

剖開-法 Partition (→分割法)

唯覚-論 Sensualism (→官能主義)

唯理-論 Naturalism (→自然主義)

予料-力 Anticipation (→予想)

念動-作用 Idio-motor action

容肯-断定 Affirmative judgment

(17語中11語)

◆合接-的〈Conjunctive〉→接合

『哲学字彙』初版の語で〈論理学〉用語として登録している。〈離接〉の対義語。現代語では〈接合〉を当てる。文字の転倒。二つの命題を「かつ」で結んで得られる二つ目の命題をいう。(『日本国語大辞典』2版「接合」の項参照)

◆殺滅-法〈Elimination〉→消去法

〈数学〉用語としている。現代語では〈消去法〉

◆説不-的〈negative〉→否定的な

『哲学字彙』初版が早い。「説不的・反面的」を当てる。一方〈Positive〉に「説正・正面」を〈Affirmative〉に「説正的・正面的」を当ている。

- ◆全成-法 <Perfection> → 完成
- ◆督制-系 <Regulating system> → 支配 (体制)
- ◆剖開-法 <Partitio> → 分割法

「全成」は「完成」に、「督制」は「支配」に、「剖開」は「分割」に、それぞれ現代語は訳し代えられている。「完成」は近代の和製漢語のようだが、「支配」「分割」は古くから漢籍に見える。新語が既存語と競合すると既存語が残る傾向があるようである。

- ◆唯覚-論 <Sensualism> → 感覺論
- ◆唯理-論 <Naturalism> → 自然主義

「唯」を冠す語基は多いが、その大部分は仏教語のようである。明治初期の訳語、とくに哲学の分野の訳語に、これに習った訳語がみえる。上記の「唯覚」「唯理」もその例であるが、現代語では訳し代えられている。

- ◆予科-力 <Anticipation> → 予想

「現代語の辞書が登録している「予科」は、学校の予備課程の意味で、英語 <Anticipation> の訳には「予想・予期」が当てられる。訳し替えられた用例になる。

- ◆念動-作用 Idio-motor action

前部の語基「念動」は『哲学字彙』初版の用語である。念力によって物を動かす意。しかし、その後は、国語辞典、英和辞典に登録されることなく廃語になった。

- ◆容肯-断定 Affirmative judgment

前部の「容肯」が『日本国語大辞典』2版に登録されているもの、他の一般の国語辞典、英和辞典に登録されることなく現代語から消滅している。この語基も『哲学字彙』が早い。現代語は肯定 (断定) を当てる。

6) 後接語基 (B2-post)

- 不信-神教 Atheism 無神論・不信心
- 自然-神教 Deism 理神論・自然神論
- 万有-神教 Pantheism 汎神論・多神教
- 唯一-神教 Unitarianism 唯一神教

後部の語基「神教」が、現代語では消滅している。ただし、英和辞典には「唯一神教」の熟語で残っている。中村正直『西国立志編』(1871)が

早いようである。宗教一般を指した。

7) 前接・後接語基 (B2-pre-post)

該当する語基なし

② すべての辞書から消滅した語基

ここでは『日本国語大辞典』(2版)を含む現代語辞典に、また英和辞典にも見つけることのできない、現代では消滅してしまった語基 (廃語) を検討する。これまで見てきた現存語と異なる点は、その大部分が『哲学字彙』を典拠としていることである。対象とする語は、先の〈表2〉で示したように自立形式の語基 87, 結合形式の語基 51, 合計 138 語基ある。

主なものを示す。

I 自立形式 (Free form)

1) 単立語基 (F2-free)

(* カッコ内が現代語)

- 化法 (還元) Reduction
- 環象 (環境) Environment
- 詭幻 (神秘) Mystery
- 虚凝 (抽象) Abstraction
- 拒力 (反感) Repulsion
- 警責 (警告) Admonition
- 権域 (管轄) Jurisdiction
- 限立 (決心) Determination
- 鈎深 (調査) Investigation
- 習成 (人為的) Factitious
- 神跡 (奇跡) Miracle
- 先機 (前兆) Presage
- 耐持 (不屈) Fortitude
- 度位 (程度) Degree
- 拝像 (偶像) Idolatry
- 謬信 (迷信) Superstition
- 貧鄙 (儉約) Parsimony
- 約止 (制止) Restraint
- 予向 (傾向) Predisposition
- 合死 (致命的) Mortal

(81 中 20)

◆化法〈Reduction〉→還元

初版の訳語は「節約・還元法(論)・化法(数)」となっている。2版・3版もこれを踏襲する。しかし、今日の国語辞典、英和辞典には「化法」はく〈reduction〉は「還元」と訳される。

◆環象〈Environment〉→環境

現代語では「環境」と訳される。初版・再版とも同じで生物学用語とし、3版では「境遇」を加えている。「環境」は、漢籍を典拠としく周囲の境界を原義としている。日本語で、今日の意味で使われるようになるのは大正期に入ってからであろう。

◆詭幻〈Mystery〉→神秘

初版・2版とも「玄奥・詭幻・不可思議」を当て、3版はこれらに「神秘」を加えている。ただ「神秘」は、漢籍にも和書にも古くからある語である。結果的に既存語が新語を駆逐したことになる。

◆虚凝〈Abstraction〉→抽象

初版・再版・3版ともに「抽象力・虚凝(心)」を当て「抽象力」が見える。「虚凝」は心理学用語としている。「抽象」は『易経』見え、訳語の生成法としては、古語からの転用ということになる⁸⁾。

この2語「詭幻」「虚凝」のように抽象概念を内容とし、しかもこれまではなかった新しい概念の語は定着するのに時間がかかるようである。「詭幻」も「虚凝」も共に漢籍にも和書も見えない語で、それぞれの英語の訳語として造られたものである。

◆権域〈Jurisdiction〉→管轄

初版・再版・3版ともに「管轄・権域」を当てる。「管轄」が〈jurisdiction〉の訳語として定着したことになる。「権域」は和製漢語であるが「管轄」は漢籍の用語である。既存語での置き換えということになる。こうした場合、新造語より既存語の方が生き残る傾向が強い。

〈jurisdiction〉は、今日では「管轄権・管轄区」など、また「司法権・裁判権・支配権」など多くの訳語をもつ語である。

◆限立〈Determination〉→決意

〈determination〉の『哲学字彙』の訳語としての履歴は、初版・再版「決意・限立」、3版「決

定・決意・規定・限定(論)」である。3版では「限立」が見えない。「限立」は『哲学字彙』以外の用例は見つからず、他で用いられた形跡がない。こうした語は消滅する確立が高い。とくに、この例のように多くの競合する語がある場合は、その傾向が強い。

◆習成〈Factitious〉→人為的

初版・再版「習成」、3版「習成・人造的」と「人造的」が加わる。〈factitious〉の現代語訳は「人為的な・人工的な・わざとらしい」などで「習成」は消滅している。ただ「習成」は誤訳ではないであろう。3版の「人造」は、幕末の和製漢語で明治初期の翻訳書を中心に見える。(注『日本国語大辞典』2版)「人工」も同じころの和製漢語のようである。

◆約止〈Restraint〉→制止

初版・2版は「拘束・禁制・約止……」などを当てているが、3版では、これに「抑制」を加えている。今日の〈restraint〉の訳は「抑制・制止・拘束」が基本である。3版の「抑制」が主になって定着し、それとあいまって「約止」が姿を消したことになる。

◆預向〈Predisposition〉→傾向

初版・再版は「予向」を当てるが、3版になると「素質・素因・預向・素性・性向…」など大量の訳語が見える。現代の英和辞典は「傾向・素質・体質」を当てるのが基本であり、このうち「預向」に取って代わったのは「傾向」と考えられる。

◆合死〈Mortal〉→致命的

初版・再版・3版とも「合死」当てる。現代の〈mortal〉の訳は「死」の形容語で「死ぬべき運命の・死の・致命的な」などである。「合死」は、先の「預向」などととも漢籍にも見えないようであるから、明治初期に訳語として造られ、その後使われることなく、また語基として他の合成語の要素ともなることなく消滅した語ということになる。

『哲学字彙』の初版の訳語のうち、現代語では見られなくなった語を取り上げた。一つの傾向として、初版と再版の間には2年しか間隔がないと

いうこともあってそれほど訳語の更新はないが、3版では大幅な更新が見られる。この3版の訳語の増加や改訳は、再版と3版の間には28年間という間隔があること。初版・再版は英語のみを見出しとした訳語であるのに対し、3版は英語の他にドイツ語、フランス語を見出しにし、さらにラテン語・ギリシャ語の注記を併記しているため、これまでの英語の訳語だけでなく、他の外国語の訳語も取り入れられたこと。3版の出た明治45年といえ、近代の訳語、また他の新出語も出揃い、さらにそれらが整理されて近代語が成立している時期であること。大手の丸善書店の助力を得たことなど、3版が初版・再版の延長線上にあるものの、諸般の条件が加味された成果によるものと考えられる。

2) 単立・前接 (F2-jree-pre)

明治期に造られた和製語基で、単立・前接語基のうち、現代語では見えなくなった語基を検証する。

原造 Originality

原造-力 Origination

合性 Natural

合性-産生 Gamogenesis

祇虔 Piety

祇虔-教 Pietism

(6中3)

◆原造〈Originality〉→創造

原造-力 Origination

初版・再版「原造・機軸」に加えて〈origination〉に「原造力」を当てている。3版では「原造・機軸・靱成力・創始力・原始態・創見」と多くの語が挙げられている。ただ、ここでも「原造」が第一義にある。

現代の英和辞典は〈originality〉に「創造力・創意」を当てるのが基本である。「創造」は、古い漢籍の用語で、日本語では『英和対訳辞書』(1867)に〈create〉の訳語として見えるという。

「原造」が、「創造」に取って代わられたことになるが、新語が既存語に駆逐されたことになる。

◆合性〈Natural〉→自然

合性-生産 Gamogenesis

初版・再版・3版とも〈natural〉の訳語として「合性・自然・天真」を当てる。ただ、3版は、たとえば「〈Natural dualism〉自然的二元論」のような熟語をいくつも挙げている。〈natural〉の訳語として「自然」が確固たることを示している。しかし、3版にも「合性」が見える。「合性」のその後は確認はできないが、今日の英和辞典・国語辞典ともに見えない。

◆祇虔〈Piety〉→敬虔

祇虔-教 Pietism

初版・再版〈piety〉「祇虔」、3版では「畏虔・尊信・祇虔・虔誠・虔教・敬虔」と多くの訳語が見える。また〈pietism〉の訳にも、3版で「虔誠主義」が加わる。結局、3版の「敬虔」が現代の訳語となった。

3) 単立・後接 (F2-post)

◆成来〈Descent〉→降下

人類-成来 Descent of man

初版・2版・3版ともに「降来・成来(生)」を当て、生物学用語としている。現代語では「降下・没落」が当てられる。

4) 単立・前接・後接語基 (F2-pre-post)

該当する語基なし

II 結合形式の語基 (Bound form)

5) 前接語基 (B2-pre)

可知-的 Knowable → 知るうる

起想-力 Cerebration → 思考

助記-法 Mnemoinics → 記憶術

推諷-法 Illation → 推論

靱製-力 Inventive power → 独創的な

靱造-力 Creative power → 創造的な

定種-法 Specification → 明細

可離-偶有 Separable accident → 分離できる

換体-断定 Converse → 談話を交わす

可転-断定 Convertend → 転換

経練-哲学 Empiricism → 経験

混容-学派 Syncretism → 混合

主楽-学派 Hedonism → 快樂
 実反-名辞 Contrary term → 反対の
 適理-名辞 Compatible term → 調和して
 (45 中 15)

それぞれの後に示したのが現代語の訳である。「可知・可離・可転」のような中国語の構造になる語、現代語でもフレーズで訳している語、「起想・実反・適理」のような訓読で容易に理解できる語もある。ただ、これらの語は、ここに示さない語も含めて『哲学字彙』の用語であることである。辞書に登録されたものの普及しなかった語ということになる。

6) 後接語基 (B2.post)

不容-間位 Excluded middle → 中位の
 匿証-佯争 Petitio principii → 先決問題要求の虚偽

7) 前接・後接語基 (B2.post)

可覚-的 Sensible → 分別のある
 固有-可覚-的 Proper sensibles
 論体-虚偽 Logical fallacy → 論理上の
 純粹-論体-虚偽 Pure logical fallacy

いずれも訳し直されている。後接語基の「間位」は、現代語では「中位・中央」になる。「佯争」は、どの国語辞典にも漢和辞典にも見えず、英和辞典では上記の熟語で「先決問題要求の虚偽」と説明し論理学用語としている。また、前接・後接の「可覚」も「分別のある」とフレーズで置き換えられ、「論体」は「論理上の」に訳し換えられている。

以上は、明治期の訳語が消滅してしまい、現代語では新たに訳し替えられている語基について、主なものを拾ってみた。ここで触れた語基も含めて、そのほとんどが専門語であり、資料の『哲学字彙』の用語である。

術語は、たとえ難解な語であっても一般語に比べると比較的固定しやすい傾向にある。しかし、表 2 が示すように、明治前期に造成されたと考え

られる和製漢語語基の 39.7 % が、現代語では訳し替えられている。この数字は、当時の啓蒙家たちの、全くの未知の世界に踏入り、それを理解し訳語を造成するという作業の困難さを如実に語っているものと考えられよう。

9. おわりに

資料『哲学字彙』にみられる「和製漢語」の造語要素である「語基」(stem)の生成法と、これを合成する複合語の語構造について検討した。

『哲学字彙』に収録された語彙は、幕末・明治初期に英学の翻訳をとおして造成された人文科学の根幹をなす術語である。そして、それらのすべてが「和製漢語」ある。ただ、これらの訳語のすべてが、現代語として残っているわけではなく、その後、訳し換えられて、初めの訳語は消滅したものも多い。どのような語・語基が残り、どのような語・語基が訳し換えられたり廃語になったりするのかを個々の例に当たりみてきた。

ここから導き出せることは、まず、訳語語基を特定すること、そのために原語である英語を語基に分解し、それに漢語の語基である漢字を当ててゆく方法が基本になっていることである。その場合、それら英語の語基に当てられる漢語の語基が既存のものか、新たにそのために造成されたものかが根本になる。この期に造成された「和製漢語」の〈単立語基〉のすべてが新たに造成されたものである。次に、これらの語基を要素にして 3 字語、4 字語といった複合語が生産されるシステムが確立されてゆく。

語基の生成法は、自立形式では、a) 初めから 2 字の単立語基として生成される。b) 先ず 3 字語ができ、その前接辞または後接辞が脱落して 2 字の単立語基が生成される。c) 4 字語の前部、後部が分裂して 2 字の単立語基が生成されるの 3 様がある。

一方、結合形式では、3 字語の 2 字部分が新しい語基として生成される。また、4 字語の前部、後部、あるいはその片方が新規に造成される。もちろん、それらが単立語基になりうる場合もある。

こうして生成された語基であるが、そのすべてが定着するわけではなく、本資料の『哲学字彙』初版の場合、39.4%（自立形式 37.7, 結合形式 42.9）が現代語には見えず消滅している。

どのような語・語基が残り、どのような語・語基が消滅するのか。確信的なデータは得られないが、誤訳を含めて内容にそって訳し代えられること、術語であっても個人の（ある特定の個人の訳文）資料にのみ用いられた語・語基は定着しにくいこと、同一原語に複数の訳語が当てられ競合して一方が落ちること、漢語基である漢字が特殊であること、その新造語の構造が日本語の文法から離れていること、語基である漢字が定訓をもたず難解であるなどが概略として指摘できよう。

今後の、さらなる広範なデータによる調査と分析の結果を待ちたい。

〈注〉

- 1) 森岡健二編著『近代語の成立』（昭和 44・1999 年、明治書院）における「形態素論」, pp. 323-350

- 2) 注1) 同著／永島大典著『蘭語和英辞書発達史』（昭和 45・1999 年、講談社）飛田良文編『『哲学字彙』訳語総索引』（昭和 54・1979 年、笠間書院）
- 3) 『哲学字彙』初版（明治 14・1881 年）〈緒言〉（原文漢文）
- 4) 〈F1-Free〉の前部〈F1-〉は、1 字の自立形式の語基を表す。したがって〈F2-〉は 2 字の自立形式の語基となり、以下〈B1-〉〈B2-〉は、1 字の結合形式の語基、2 字の形合計式の語基を表す。
- 5) 日本物理学会『文部省・学術用語集』物理学編（改訂版、1990 年）
- 6) 日本化学会『文部省・学術用語集』化学編（2 版、1986 年）
- 7) 筆者論文「科学」の項『講座・日本語の語彙』（明治書院）
- 8) 筆者論文「『明六雑誌』の語彙構造」（神奈川大学『人文学研究所報』NO 34 号）pp. 39-52
- 9) 注1) 同著「漢語訳の方法」として、置きかえ・再生転用・変形・借用・仮借・造語の 6 つの方法を挙げる。pp. 226-291

* 本論文に先立ち、本誌 NO 24 号（1991 年）に「『哲学字彙』の語基と訳語法—その 1・語基表—」を発表している。今回の、この論文の語基分析も先の論文の「語基表」によるものである。

Word stems in “Tetsugaku-ji”

Word stems of the Japanese-made Chinese words and the method of word creation and formation

TAKANO Shigeo

The paper, which is mainly based on the materials taken from the “Tetsugaku-ji” (first edited in 1881 (Meiji 14)) analyses all the vocabulary and break them into the element of the words called word stems and unravel the methods of their creation proceeded by the putting of newly created words back in to the original words; thus, the paper attempts to examine the system which form the Japanese-made Chinese words.

Among those newly created word stems formed during this period, there are those that are still in use in modern language and those that are already “dead” (which constitutes about 39.7%) and that have been translated into new words. Which words and word stems continue to be in use and which cease to exist? The paper focuses on the unit of the word stems of the Chinese character based on the word formation.